

コメディリリック第1回「へ夕に経た」

「経たねー」

登場人物

高木 ペイリー・チャイルド

吉野 テオ・ポー

白石 シロスコフ

齋藤 野彦

※全員、板付き

【L・明転】

※吉野、齋藤、登場

合コン前にそわそわする4人

高木 「（電話しながら）はいはい、了解―」

吉野 「なんて？」

高木 「一人、女の子遅れててみんな待って  
から来るって。てかお前怪我大丈夫？」

吉野 「勝った証だから」

高木 「どういふこと？」

齋藤 「それ本当に来るの!？」

高木 「来るよ（笑）何を焦ってんだよ」

齋藤 「ごめん。こういう飲み会みたいなの初  
めてだからさ」

吉野 「バイト先に可愛い子とかいないの？」

齋藤 「中東系のおじさんしかいない」

白石

「マジか。うちの会社のVR貸そうか？  
おじさんが全員ガッキーに見えるように  
もできるよ？」

齋藤

「深キョンでもいける？」

白石

「いけるいける」

齋藤

「マジかー」

高木

「まあまあ、今から現実の女の子が来る  
んだからさ」

吉野

「てか、高木彼女いるよね？」

白石

「親父さんの葬式に出てた人？」

高木

「そうそう」

齋藤

「浮気じゃん（笑）」

高木

「違う違う。こうやって飲み会とかで女  
の子と話して「あー俺の彼女は可愛い  
な」とか「やっぱ彼女の方が気が合う  
な」とか愛情を再確認するんだよ」

吉野

「はー」

高木

「女の子達には悪いけどね」

白石

「いやー高木、経たねー」

吉野

「ん：経たねー？」

白石

「高木がもう色々経験して色々経てそう  
いう考えになってるじゃん。だから経た  
ねーと思って」

吉野

「なるほどね。それは確かに経てるわ」

高木 「確かに経たねー」

白石 「経てる。それは経てるわ」

高木 「でもやっぱ考え方とか変わるよな？ 白石も就職して色々変わったでしょ？」

白石 「めっちゃくちや変わったよ。特殊な仕事だから正直最初はだいたい引いたけど、人様が自分で作る幸せをとにかく言う権利はないっていうか、咎めることよりも認めることの方が難しいし価値があるって思う」

「経たねー！」

吉野 「経てるなー！」

高木 「ほんと経たねー！」

白石 「いや、ここ最近よ。経たのはここ最近」

「成長してんなあ」

吉野 「やっぱ学生とは違うな」

高木 「いやいやそんなことないよ。吉野だって、さつき齋藤に聞いたよ？ 怪我の話」

白石 「え、なにになに？」

高木 「この怪我さ、二人でいる時にほんと熊みたいなキャッチに絡まれて、でも吉野」

齋藤 「一歩も引かずに、暴力でじゃなくてなぞなぞで勝負だって、張り合って」

高木 「なに？ その怪我だったの？」

吉野 「まあ、結果ボコボコにされたんだけどね」

高木 「マジかよ、全然気づかなかった」

白石 「でもそれ訊いた時さ、マジ吉野すげーって思ったよ。だって普通怖いじゃん。自分守るためにとりあえず手を出したりするじゃん。それを吉野はさ、なぞなぞっていう自分のアイデアを出して、そこで勝負しようとしたわけでしょ？ その上で手を出さずしてそのキャッチの方が余程カッコ悪いしダセエ。お前スゲーよ」

吉野 「嘘？ 自分ではそんな風に思わなかったんだけど」

高木 「いやーそれは相当経てるよ？」

吉野 「ほんと？」

高木 「相当。相当、経てる」

吉野 「経てれてる？」

白石 「経てるよ！」

齋藤 「うん。傍で見てて、吉野経てんなあって思ったもん！」

吉野 「そうかー経てたかーよかったわ」

高木 「みんな経たねー！」

白石 「経たねー」

齋藤 「経るよなーやっぱ、俺もちよっと経た  
案件があつてさ」

吉野 「うんうん」

齋藤 「いや、バイトをさ、寝坊したのよ。3  
0分くらい遅刻しそうになって。それで  
これ逆に5時間くらい遅刻したら逆に心  
配されて怒られないんじゃないかと思っ  
て、5時間遅れて行ったの。そしたら読  
み通り怒られなかった。計算通り」

白石 「…いや、お前、それ経てないよ」

齋藤 「え？」

白石 「ダメじゃん。遅刻しちや。すぐに行こ  
うよ」

齋藤 「いや、まあ、そうか」

白石 「俺らは社会人なんだから、しっかりや  
らないと」

齋藤 「まあ、そうだね」

高木 「経てないじゃん」

吉野 「まあ、いずれ経るでしょ？な？」

齋藤 「いやいや、経てる時もあるんだよ？」

吉野 「そかそか」

齋藤 「アニメとか観なくなつたもんね。全然  
興味ないもん！」

白石 「…いやそれはまた違うんだよなー」

高木 「わかるわかる。アニメは観ちやうよ  
ね？」

白石 「観ちやう観ちやう。経たからこそ観ち  
やうところがある」

高木 「戦隊モノとかも観ちやうもんね？」

白石 「分かる！経るとき、子供の観るものに  
勇気もらうんだよね！アンパンマンの歌  
とかめちやくちや励まされるもん」

高木 「うわー！わかるわー！アンパンマンの  
歌は励まされる！経たからこそ響くアン  
パンマンの歌！」

齋藤 「わかるよ。俺もサザエさんの歌、大好  
きだもん」

白石 「サザエさんは違うでしょ？全然響かな  
いよ」

高木 「うん。サザエさんは経てないよ」

白石 「経てないね」

吉野 「先に注文しとこうか？」

白石 「そうだね」

吉野 「生の人は？」

白石 「あ、俺は生で。あ、黒ビールある？」

吉野 「あるよ。経てるねー」

高木 「俺、どうしようかなー。電気ブランか  
な？」

吉野 「うわーめちゃくちゃ経てるじゃん！し  
つぶ！齋藤は？」  
齋藤 「バーボンかな」  
吉野 「うん：俺はジャスミン杯かな」  
齋藤 「え、ジャスミン杯？（笑）」  
吉野 「うん」  
白石 「ジャスミンってあれだよな？性欲高め  
る作用があるんだよね」  
高木 「え、そうなの？」  
吉野 「そうそう（笑）なに飲んでるのー？つ  
て聞かれたらジャスミン杯って答えて勧  
めようと思って」  
二人 「経てんなあ！」  
吉野 「そう？（笑）」  
白石 「めちゃくちゃ経てんじゃない！」  
高木 「経てるなあ！」  
白石 「齋藤、こういうことだぞ？経るって」  
齋藤 「難しいな」  
白石 「ほんとにバーボンでいいの？無理して  
ない？」  
齋藤 「あ、じゃあ、カルアミルクで」  
吉野 「おけおけ（笑）」

白石 「いいんだよ齋藤。無理して経なくて  
いいんだから。経るって自然に経てるも  
んだから」  
齋藤 「うんわかったわ。無理して経ないわ」  
白石 「いいんだよそれで」  
吉野 「ねえ、今日の女の子たちってさ、可愛  
い？」  
高木 「めちゃくちゃ可愛いよ」  
吉野 「マジかー経てえなあ」  
白石 「確かに経たいな」  
齋藤 「経れるかな？」  
吉野 「どうだろう？ワンチャン、ワンチャン  
経れるかもね」  
齋藤 「うわー経てー」  
高木 「経たいねー」  
白石 「高木は彼女いるじゃん」  
高木 「そこはそりゃ経たいよ」  
白石 「まあ、そうか」  
4人 「はー経たいなあ」

【し・暗転】